

韓国の対中貿易収支の赤字転落とその要因分解

奥 田 聡

韓国経済の発展に積極的な輸出戦略が大きな役割を果たした。だがその行く手には今暗雲が立ち込めている。中国市場への輸出が著しい不調に陥っているからだ。

韓国経済のドル箱だった対中貿易

1997/98年のアジア通貨危機を乗り越えた韓国経済は2000年代に入っても年5%程度の成長を実現し、2008年のリーマンショックに際しても先進国の中で最も早くダメージから立ち直った。2000年代から2010年代初頭にかけての韓国経済の着実な成長の立役者となったのが対中貿易であった。

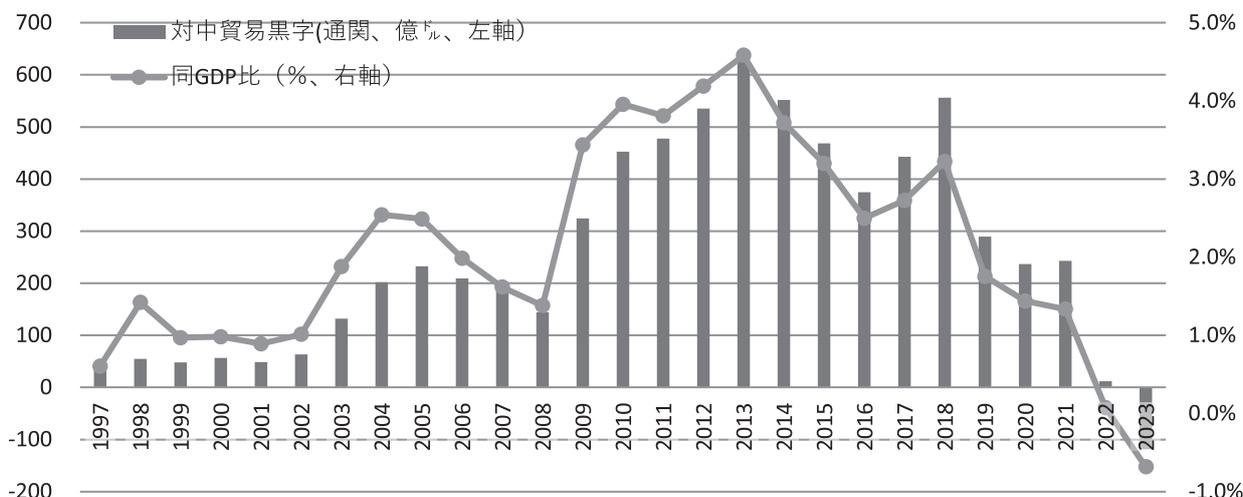
アジア通貨危機後、企業が雇用や投資に慎重になり内需は低迷した。そうした中、景気の底割れを防いだのが外需であった。とりわけ、対中貿易黒字の貢献は大きいものがあつた。図1では、対中貿易黒字が2000年代に一貫して増加

し、その経済的インパクトもまた増していったことが描かれている。対中貿易がその重要性をさらに増すのは2008年のリーマンショックの後だ。極度の不振に陥った対先進国貿易に代わり、韓国は中国・インドなど新興国への売り込みを強めた。乗用車やスマートホンのヒットもあつて2013年の対中貿易黒字は628億ドル、GDPの4.6%に達した。

勃興する中国に圧倒された10年

対中貿易黒字が韓国経済を潤す状況は徐々に変化していった。中国が消費財の輸入代替において成果を出すようになり、韓国勢は次第に苦戦を強いられるようになった。韓国製の家電、乗用車、スマホは次々と中国市場のランキングから姿を消していった。2010年代中盤以降、消費財に代わって対中貿易黒字を稼ぎ出したのは中間財であった。化学製品、機械、光学・精密

図 1 赤字に転落した韓国の対中貿易収支



注：2023年の数値については以下のように取り扱った。貿易収支：1-5月の実績を通年換算、GDP：IMF経済見通しでの伸び率を勘案して算出。

データ出所：韓国銀行経済統計システムほか

製品(フラットパネル)の貢献もそれなりにあったが、とりわけ大きな存在だったのが半導体であった。2018年には半導体の対中貿易黒字が346億ドルを記録した。

中国が輸出用中間財の生産に十分手が回らない状況を踏まえ、韓国としてはこれらを供給することで中国の経済成長の利益に与ろうとした。これは、韓国の輸出主導的経済発展が日本からの機械、部品、素材の供給を内包し、結果的に日韓が経済発展の利益を分け合ったことと同様の構図と言える。

しかし、その間も中国企業が中間財の分野においても競争力を強化し、あるいは中国がその調達先を転換するケースが相次ぎ、ついに韓国が黒字を確保する基盤が消滅するに至った。2022年の対中貿易黒字は12億ドルにまで低下、23年には1-5月で118億ドルの赤字に転落した。

対中貿易収支の要因分解

図2はこれまでの韓国の対中貿易収支を要因分解し、図示したものである。これによれば、対中貿易収支の水準は半導体輸出に大きく左右される非価格要因による黒字の消長によるところが大きいことがわかる。

ここで、非価格要因による黒字とは、輸出重量単価>輸入重量単価の状況で黒字となるケース、つまり韓国製品の価格が高いのに中国はそれを買う場合であり、韓国としては、対中黒字は採算面からも非常に有利なものであったのだ。

2015年には非価格要因の黒字は582億ドルに達した。この大幅な黒字をもたらしたのは半導体

であった。しかし、コロナ禍前の2019年ごろを境に非価格要因による対中貿易黒字が急速に縮小し、22年には155億ドルにまで低下した。中国は高付加価値な半導体製品に強い台湾からの調達を強化し、メモリ中心の韓国からの調達の重要性は次第に低下した。韓国が採った半導体への集中策は完全に裏目に出た形である。

このほか、光学・精密製品では調達先転換、自動車部品では韓国車の不人気による現地工場の操業縮小により対中輸出がそれぞれ減少し、非価格要因の貿易黒字が大きく減っている。

一方2015年ごろから目立ってきたのは価格要因での貿易赤字である。これは、輸出重量単価>輸入重量単価の状況で赤字となるケースである。韓国製品の価格が高く対中輸出が不首尾となるか、あるいは中国の安値の製品を韓国が輸入するかのどちらかであるが、各品目の対中輸出の現場では輸入急増よりも輸出の不振を挙げる声が多い。輸出不振で各品目の対中収支が赤字化するが、輸出が続いている分については価格が韓国側有利となっているので「韓国側の価格が高く中国が買わない」というように見えるというわけだ。こうした赤字要因に加え、非価格要因による黒字が大きく落ち込んだことが2023年の対中貿易の赤字転落の要因であった。

今後の韓国の戦略は？

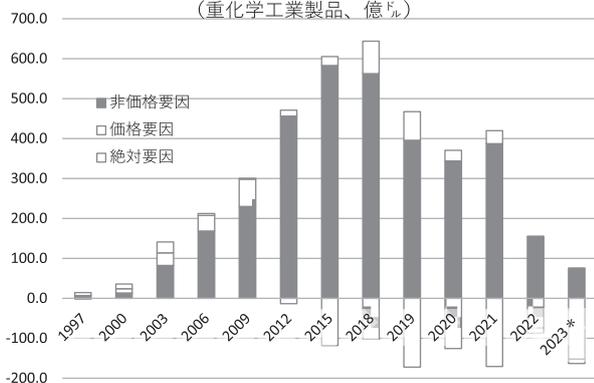
有利な輸出市場を失った韓国。韓国貿易協会が6月2日発表した「対中国輸出不振と輸出市場多角化推移の分析」が示す処方はこちらだ。市場別には米国、豪州のほか、インド、ベトナムなどの新興国を攻略し、韓国がシェアを伸ばしている品目を丹念に選んで輸出拡大を図っていくべきであるとする。

しかし、その前途は険しそうだ。米豪市場への注力は、親米ブロック内での保護主義的な利得追求の色彩が強く、インド、ベトナムでの展開を考えるにしても、中国市場での苦戦が再現される可能性が大いにある。

八方ふさがりのような状況にある韓国だが、日本も実は同様である。韓国がどのような戦略で活路を見出すかは我々にとっての解法でもあるのだ。注視していきたい。

(おくだ さとる・アジア研究所教授)

図2 韓国の対中貿易黒字・要因分解
(重化学工業製品、億ドル)



注:2023年は1-5月の実績。絶対要因は、輸出入単価比が算出不能な片貿易のケースが該当。出所:韓国貿易協会提供のデータより筆者計